

鉋の話

波兵衛

現在は、住宅設備等メーカーの工場で作られた材料を組み立てることで、木造住宅が出来上がることは当たり前ですが。

昭和の時代(戦後からオイルショックまでの頃)は、木造住宅の材料供給の主役は材木屋であり、建築の主役は棟梁と呼ばれ、大工は材木屋の下小屋を借りて木材を墨付けし、刻み(木材の継手の加工)をして、最後に削り、仕上げ面に砥の粉を塗ったり、紙を貼ったりする養生をして上棟に備えます。建物が出来上がった時に見える部分は、手鉋で仕上げます。

この仕上げ削りは大工の腕の見せ所なのです。

今回の話はこの鉋の話なのですが、鉋に関する武勇伝は沢山あります。

仕事中に職人同士の鉋に関する自慢話が始まります。

削り面が上手に仕上ると“ハエも止まらないよ”とか、“ツルツルに削れ過ぎてハエが滑り落ちてしまった”なんていう自慢が最たるものです。

自分の腕を鼓舞するために職人さんは良い道具を買い求めます。

私が下小屋に行った時、石堂が切れるとか、千代鶴は偽物ばかりだよ、東源氏は石橋さんが打っているのだよ、と言う銘柄の話とか、こういう感じの鉋刃は切れると教わったものです。

鉋の品定めに関する話とか、何処の道具屋に行くと良い道具が買えるとか、道具屋の店主の癖に関する面白い話もありました。

ある店の店主は、同じ銘の鉋を何丁か見せてくださいとお願いすると、うちの刃物はどれも一緒だから、品定めしても意味がない位のことを言い、取り合ってくれない頑固おやじだから、あの店にはもう行かないなどと言う、落語みたいな話も転がっておりました。

研ぎに関する話もあり、刃物の表面と刃裏仕上げ研ぎは、どちらが最後にすることとか、興味のある話ばかりでした。

子供心に、職人が鉋屑をシューっと出して削る姿を見て、“あんな感じで木を削れたら気持ちが良いだろうな”って思っていたし、また先ほどの自慢話とか道具の話聞くのが楽しみでした。と同時に材木の質に関する良し悪しの話し、墨付けの話し等、材木屋としての知識も一緒に教わり、いろいろな意味で”門前の小僧習わぬ経を読む“と言う諺通りでした。

そんな私自身の幼少期があり、刃物に関する興味が普通と違っていたようですし、今日では尋常でないほど道具が集まってしまいました。

家業を継いでからは、刃物の良し悪しの判断は出来ないながらも、地方に行った時、道具屋を探して珍しい鉋を購入したり、その地域の鍛冶屋さんの話を尋ねたりすることが楽しみでした。

刃物道具の情報は職人、道具屋の店主からの口伝えによるもの、一部の書籍に頼ることで知識を得ておりました。



左 石堂輝秀 (菊池清一さん作)
右 飛雲 (石堂秀雄さん作)



左 千代鶴鉦 (佐野勝次さんの作)
右 東源次鉦 (石橋藤七さんの作)

Windows98が発売されて以降、インターネットが徐々に普及し、刃物好きのブログとか、刃物店のブログ等によって道具に関する情報は、体系的な要素も含まれ広範に得ることが出来るようになりました。

ヤフーオークションやネット販売等のお陰で、家にいながらに好きな品物が買えるようになりました。江戸時代の古い物から最近作られた新品の鉦、錆びだらけの使い古された鉦刃など、多種多様で欲しい品を入手できる魔法の市場です。

刃物の点数が増えると、時代背景の系列と、地理的な背景の謎が解明される感じで、謎の部分が刃物

で埋まって行きます。

江戸時代以前は、割った木材を斧や手斧ではつった面を、槍ガンナで仕上げておりました。

江戸時代には一枚刃の台鉋が主流になり、明治以降建築はブームにより俄か職人も多くなり、難しい一枚刃鉋から安易に木材を削れる二枚刃鉋に変わって行きます。

その二枚刃鉋は、今は普通の鉋として使われております。

このような時代背景の中で、廃刀令と各地の産業のために刀鍛冶が野鍛冶に変わり、農具・包丁・大工道具を作るようになり道具の産地が熟成して行き、日本刀から生活用の刃物へと時代の変化で作られる品も変わって行きます。

明治以降、道具屋さん刃物問屋さんが刃物の流通を仕切っており、鉋の名前も問屋さん独自の刻印を打ったものが主流でしたが、自身の鍛冶屋名で刻印を打って販売していた鍛冶屋さんもありました。

問屋名で流通していたものは、何処の鍛冶屋さんが打ったものか判別するのは難しいのですが、槌の打ち方・特徴ややすりがけの形状、鉋裏の模様・刻印の打ち方の違いで鉋の作者を想像するのは面白いのです。

最初に話した千代鶴鉋は偽物が多い話で、千代鶴是秀さんは天皇陛下へ刃物を献上するような、又優秀な品を作ること叙勲された有名な鍛冶師でしたが、手作業で刃物を製作しておりましたし、丁寧な仕事をされていた事、芸術的なセンスが秀でており、鉋・小刀・鑿^{のみ}などをはじめ様々な道具を作っており今でも残っているものが多いようです。

是秀鉋は使うより神棚に飾っておく道具と言う話は刃物の話で良く述べられておりますし、その頃の千代鶴のカンナは大変高額で簡単に買えるものではなかった様です。

千代鶴是秀さんの鉋は“是秀”“藤四郎”“千代鶴運寿”が非常に有名ですが、三代目千代鶴延国の時に登録商標の問題で千代鶴の名前が使えなくなり“千三代”銘で鉋を打っていた時もありました。

その頃この登録商標を手に入れたある刃物問屋が“千代鶴”“千代鶴運寿”銘の刻印を、東京、新潟などの鍛冶屋さんに渡して、沢山の千代鶴鉋を作らせ販売していたようです。

今で言うとOEMと謂うところですがそれらは非常に良く切れますし、50年以上前に作られた鉋ですが今でも安くない値段で売られております。

次回から、蒐集した鉋の生い立ちと鍛冶屋の話、研ぎと砥石に関する話をしていきたいと思います。